子育てひろばの機能の検討
―支援者と利用者のインタビューをもとに―

及川　留美・石井　則子*

Examination of the Functions of Child-Rearing Space: Insights from Interviews with Supporters and Users

Rumi OIKAWA, Noriko ISHII*

Abstract

The purpose of this study is to understand the actual usage and needs of child-rearing spaces through interview surveys with supporters and users of child-rearing spaces, and to examine the roles and functions of child-rearing spaces. Given the characteristics of space as a space for parents and children to spend time together, the primary goal of the facility is to promote children's play and improve parent-child relationships. In this context, the role of supporters is to facilitate gentle connections among participants and promote the growth of both parents and children through the children's play.

Keywords：functions of children-rearing space, children's play

1. はじめに

〈1･1〉地域子育て支援拠点事業の現状

地域子育て支援事業（子育てひろば）は,地域子育て支援センター事業(1993年～)とつどいの広場事業(2002年～)を前身としてこの２つが統合され,2007年よりに開始された。地域子育て支援事業では,①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進②子育て等に関する相談,援助の実施③地域の子育て関連情報の提供④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施基本事業としており,2023年度には全国で8016カ所の実施が報告されている[1)]。実施カ所数の目標はほぼ達成したといえるが,運営主体や実施場所,支援者等の経歴や背景が多様であること,子育て家庭のニーズの多様化などから,現在支援の場における支援の質が課題となっている。

〈1・2〉本研究の目的

これまで子育てひろばにおける空間使用や物的な環境に焦点をあてて研究を実施してきた。及川(2020）では,子育てひろばの実地調査と支援スタッフに対するインタビュー調査から,「親子（特に親）が安心して過ごせること。」「利用者や支援スタッフは多くの親子が見える（見渡せる）こと。」「子どもが主体的に遊び込めること。」を重視し,地域の実情に合わせ環境の工夫をしていることが明らかになった。また,これらの環境構成は,親子間に適切な距離を創出し,そのことによって親子と支援スタッフや他親子とのつながりを生み出し,親子の関係性を改善するなどの支援者の意図が含まれていることが示唆された[2)]。

及川・石井（2023）では,神奈川県中部のA市,B市の子育てひろばを利用する親子にアンケート調査を実施し,親子の利用ニーズと子育てひろばの間接的支援である環境との関連について考察した。この地域においては子どもの遊びが充実することを主な利用目的としている親子が多いことが明らかとなった。そして子どもの遊び場としてのひろばの機能を重視している利用者は,他の親と交流ができることや子育てに関する相談ができることはあまり重視しておらず,遊び環境の充実とアクセスの良さや利用時間などのひろば利用に関する利便性を求める傾向にあった。一方,子育て中の親子と知り合うことや子育て相談をすることを目的とする利用者は,利用の利便性についてあまり重視していない傾向にあった[3)]。

本研究では地域子育て支援事業のひろばの機能面に焦点をあて,子育てひろば利用者および支援者を対象としたインタビュー調査からより詳細に子育てひろば利用の実態とそこに求めるニーズを把握することを目的とする。そしてこれまで実施してきた子育てひろばの環境に関する研究の結果と合わせ,子育てひろばの役割や機能について検討を加えることで今後の支援の方向性について考察する。

2. 研究方法

〈2・1〉調査の対象

A市とB市の境界にある子育てひろばに研究協力に関するポスターを掲示し,子育てひろばの利用者を対象として研究協力者を募り,母親3名の協力者を得た。3名の母親へ

*東海大学児童教育学部
ISSN 2758－4488

は,研究の目的および方法,研究データの利用および保管について説明し,研究参加への同意を得た。またA市内にあるKひろばに研究協力への依頼をし,支援スタッフの2名のインタビュー調査の協力を得た。

の了承を得てボイスレコーダーに録音した。録音した内容を逐語録としてデータ化し,前述した及川・石井（2023）におけるアンケート調査[4)]の結果と併せて考察する。

なお,本研究のインタビュー調査は東海大学の人を

表１　インタビュー対象者の概要

研究対象者	子の年齢	居住の状況	子育ての状況
X	第１子 （10か月）	B市出身で現在はC市に居住。車で１時間程度のところに両親が居住。	保育士として勤務。現在育児休暇の取得中。夫と交代で計３年間の育児休暇を取得する予定。
Y	第１子 （1歳10か月）	1年前に県外からB市に転居。近隣に知り合いはほとんどいない。夫の両親が車で30分程度のところに居住。	妊娠中に退職。現在のところ今後の就職の予定はない。子どもは４月より幼稚園（プレ保育）に通園を始める。夫が在宅勤務のため、子育てにおいて夫を頼ることができる。
Z	第１子 （4歳） 第２子 （1歳８か月）	幼少期よりB市内で育ち、現在もB市内に居住。両親はB市内に住んでいるが、共に就労しているため、頻繁に行き来があるわけではない。	現在は無職。そろそろ何か仕事を始めようと考えている。第１子は幼稚園に通っている。夫の帰宅が早いため、帰宅後は子どもとよく遊んでくれる。

〈2・2〉研究の方法

・インタビュー調査１（利用者に対するインタビュー）

2名の母親に対しては個別に,1名の母親に対しては子ども同伴にて半構造化インタビューを実施した。質問の内容は現在の子育て環境について,子育てをしていて困難に感じること,子育てひろばに通う理由,子育てひろばの利用について,子育てひろばを利用したことによる親子の変化,子育てひろばに求めること（環境・支援等）である。インタビュー時間はそれぞれおおよそ1時間程度であった。3人（X・Y・Z）の協力者の概要は表１である。

・インタビュー調査2（支援者に対するインタビュー）

A市にあるKひろばの支援者に対して半構造化インタビューを実施した。質問の内容は,Kひろばのある地域の地域特性および子育て家庭の状況,ひろばでの親子の過ごし方,支援において工夫している点・留意している点,ひろばにおける環境の工夫,利用する親子の近年の変化等について等である。

A市Kひろばは2010年に開設され,開設後14年になる。商業施設に併設されているため,駐車場が広いこと,買い物ついでに利用するなど,近隣市などからも多くの親子が利用する。開設当初より支援者として勤務する保育所での保育経験のある支援スタッフにインタビューをお願いした。

インタビュー調査１,インタビュー調査２の内容は本人

対象とする研究に関する倫理委員会の承認（承認番号；23074）を経て2024年1月～2月に実施した。

3. 研究の結果および考察

〈3・1〉A市・B市および近隣の地域環境

A市,B市は神奈川県の中央部に位置し,商業と工業が比較的盛んであり,他の地域から転勤で移住して来る家庭も多い。そのため,近隣に友達や両親もおらず,孤立している子育て家庭がある。近くに海や山があるため自然が豊かで,大きな公園もあるため,子育てには良い環境であるといえる。バスなど公共の交通機関もあるが,子育て中の親子にとってバスでの移動は困難であるため,自家用車での移動が主流である。

A市には子育て支援拠点が６カ所,B市には子育て支援拠点が９カ所ある。駐車場を備えたひろばが多いため,自家用車で移動する家庭は車で20～30分かけて近隣市のひろばに行くことも多い。そのため,数か所の子育てひろばを曜日によって使い分けることもできる。一方で自家用車での移動ができない親子にとって,バスなどでの移動が主となり,気軽に子育てひろばに通うことが難しい状況であるという地域特性がある。

〈3・2〉子育ての状況

支援スタッフと研究対象者3名へのインタビューの結果から,家庭での子育ての状況について簡単に述べる。3名

とも核家族であり,親類との行き来はそれほど頻繁なわけではない。子どもの成長を楽しみとし前向きに子育てをしてながらも,母親3名にとって子どもそして育児と向き合う日常は,不安や精神的な辛さを含んでいるということが以下よりうかがえた。

X：やっぱり一対一なので,やっぱり違う。全体を見て子どもを,遊びを見るのと,こういう一対一だとついつい神経質,もちろん仕事もケガさせちゃいけないんですけど,ついつい神経質になっちゃって夫にもよく言われます。そんなに神経質にならなくていいんじゃないかって。(X-1)

Y：家だとずっとべったりくっついてるってのもあって離れたい時ってあるじゃないですか。ちょっと待ってやめてとか。ちょっと1回壁を作りたい時間が家の中では発生するんですけど,そこからお互い嫌な気持ちが発展してしまって負のループみたいな感じになってくのがあるあるなんです。(Y-1)

Z：一回,産後うつになったんです,私。生後3カ月から4カ月ぐらいまでの,0カ月からの4カ月間ぐらい。それで毎日涙が出てくるぐらい,なんにもしてなくても。もうほんとに,大変なものを生んでしまったっていう。もちろん自分が望んで生んだんですけど。ほんと1年間ぐらいの記憶があんまりなくて。周りに助けてくれる人はいたので。ただ,毎日手伝いに来てくれるわけではなかったので。両親も働いてるので。なので,1人の時間,ワンオペで育児をするっていう時間が結構大変というか,精神的に大変でした。(Z-1)

夫の育児への関与が母親の育児に対する不安感を軽減させるという研究結果は多数あり[*1],表１から3家庭とも夫の育児への関与は比較的高いことがわかる。しかしながら,母親の子育てに対する閉塞感や負担感は,夫や周囲の人の育児への関与だけでは解消しきれていないことがわかる。

〈3・3〉子育てひろばに通う理由

女性の就業率の増加とともに,近年1,2歳児の保育利用率が急激に増加し,最新のデータ[5]では59.3％（0歳児の利用率は17％）となっている。これは子育てと就労を両立させる女性が増加したということと,1年以上の育児休暇を取得後に仕事に復帰する人が増加したということの２つを意味している。そのため未就園（4歳ころまで）の利用を主として想定されていた子育てひろばを利用する子の年齢は,近年は母親が仕事に復帰するまでの1歳前後の利用が主流になってきている。支援スタッフは利用者の子の年齢のメインが最近は1歳前後であるとし,以下（支-1）を子育てひろばを利用する理由であるとしている。

支：外から来られた方は,やっぱり情報？　病院とか小学校とか幼稚園のこととか結構聞かれますね。この間は,久しぶりにご主人,パパ以外の男と話したっていうのがあったんで。そこが多分,私たちは一番じゃないかなと思ってるので,このお母さんとかとの会話をすごく大事に来てもらって,一度も話さないで帰るようなことはしないようにというのが,そんな感じではあります。(支-1)

つまり,今子育てひろばを利用している1歳前後の子を育てる母親は,子どもの遊びのためというよりは,子育てに関連することの情報収集や,母親が会話等を通して,家庭における閉塞感を和らげるために子育てひろばに通っていると考えており,母親の支援に意識を向けているということである。では,実際はどうだろうか。支援者と3名の母親の子育てひろばに通う理由に関する語りを見てみたい。

なお,それぞれの語りにおいて,子育てひろばに通う理由を母親自身のためとした内容と考えられる語りに下線,子どもの遊びのためと考えられる内容に２重下線を付した。

*X：子どもも私も,家でずっといると飽きちゃったり,マンネリ化しちゃうので,リフレッシュの意味っていうのが一番の目的で。あとスタッフさんとか他のお母さんたちとお話ししたり,今,何カ月ですかとか話せると,他の人と話すとちょっとホッとする,じゃないですけど,一番の目的はそういうところかなって考えてます。・・・・**本人も楽しそうに遊んでいるのを見ると**,また連れて行きたいなって,いい気持ちじゃないですけど,よかったなっていつも思ってます。お家だとおもちゃを出して,また飽きちゃって違うおもちゃ出してって感じなので,新しい発見があるのはすごくうれしいです。(X-2)*

Y：家はテレビばっかり見ちゃう。狭いし飽きちゃう。新鮮さを求めに。広いし。子どもがたくさん自由に遊べる場所に行きたいって思って,とりあえず行こうみたいな。

ここ（ひろば）に来ると自然にいろんなものに手を出してしかも一人で遊ぶんです。興味があってどんどん前に進んでくから私もちょっと離れたところから見守ってるだけでも全然十分遊んでくれるので,私もすっきりするし彼もフラストレーション溜まらず遊べるから気持ちの整理がつくというか,ここで午前中たくさん遊ぶと午後家でちょっとやめてみたいのは少なくなるかな。家でもっといっぱいかまってあげる時間が増えるかなって感じです。(Y-2)

Z：私のために行ってます。家にいるとどうしても,スマホをいじっちゃったり,テレビを見せちゃったりするので。それは1日ぐらいならいいと思うんですけど,毎日じゃよくないなと思うので。ほぼ毎日開いてるときは来てました。・・・下の子に関してはないんですけども,家でも1人で遊んで,こっちでも1人で割と遊んでくれてて。上の子が3歳になるまで,1年間ぐらい来れたんですけども,上の子のときが,結構家だとママ一緒に遊ぼうっていうタ

イプで。でもここに来ると,お友達と遊んだり,先生と遊んだり。私は何もしなくていい,見てるだけっていう感じが多くて,そこが違いでした。(Z-2)

X-2,Y-2,Z-2の下線からわかるように３人の母親とも,子育てひろばに通うのは自らのリフレッシュや閉塞感などから生じる負の気持ちの立て直しが第一の理由であるとしている。しかし二重下線からもわかるように,それと同程度に子育てひろばの空間や玩具を活用し,子どもが自由にのびのびと遊ぶことも重視していることがわかる。子どもや日々の育児から解放を目的としているのであれば,一時預かり等を利用してそこから離れ距離をとることでリフレッシュすることもできる。X,Y,Zはそうではなく,子育てひろばという場をわが子と共有しながら,自分の心情の立て直しと子どもの遊びの充実が同時に可能となる点に魅力を感じているということが読み取れる。

及川・石井（2023）の子育てひろば利用者に対するアンケート調査結果では,利用の目的として「子育てひろばで気分転換をしたい」という設問に対してとてもそうであると回答した割合は高かったが,「子どもを広い場所で遊ばせたい・子育てひろばの遊具やおもちゃで遊ばせたい・子どもを同じくらいの年齢の子どもと遊ばせたい」という設問にとてもそうであると回答した割合はそれを上回っていた。一方で,「子育てに関する情報が得たい」という回答は「子育てひろばで気分転換をしたい」を下回り,「子育てに関する相談をしたい」に関してはそれほど望んでいないという結果[6]であった。

これらから,子育てひろばの利用者は自らの気持ちの立て直しと子どもの遊びの充実を主な目的として子育てひろばを利用していること,この利用目的と支援者が考える利用目的には多少のズレが生じていることが推察できる[*2]。

〈3・4〉子育てひろば利用の実際

続いて,子育てひろばを利用する親子の様子とそこから生じる心情の変化について前項と本項における支援者や母親X,Y,Zの語りを含めて考えてみたい。

支：結構,やっぱり人見知りの時期なのかな。ママにくっついてる子も多いんだけども,一人遊びはやっぱりできる。なんでここだと,一人で遊べるのかなっていうのはありますね。この間,そういうふうにおっしゃってたお母さんがいて,私たちもやっぱり遊ぶので,ママと遊ばなくてもスタッフさんと遊ぶんだというのがすごく不思議みたいです。お家だとママとべったりなのに・・。（支-2）

X：（お家とは違う環境なので,お子さんのちょっと新しい変化に気づいたりとかって）

気がつきます。こんなので遊ぶんだとか。こういう木のおもちゃとか,今まで家になかったんですけど,こういうおもちゃがすごい好きなの,分かって,買ってみたりとか,そうしたらすごい家でも遊んでくれたり,そういう発見もあったりしてます。(X-3)

（お仕事されている時と,子育てされている時って,ちょっと違う）

もちろん,かわいいなって思うのは一緒なんですけど,視野が狭くなっちゃうっていうのがすごい自分としてあって。またこれから1人で1年間育てると視野が狭くなっちゃうなって思うので,やっぱり,こういう外に出ていろんな人の意見とか聞いたりするのって大事だなって思います。・・

やっぱり,ちょっと誰かに話を聞いてもらうっていうのが大事,すごく大事です。分からないこともいろいろあるので,ちょっと聞いて,平気だよって言ってくれると,ちょっと安心します。そんなアドバイスもらわなくても,平気だよって言ってくれるだけで,あ,大丈夫なんだって思います。(X-4)

Y：ここに月齢で出来ることって変わってくるじゃないですか。それを発見できるのってここなんです。家で出来るようになったことに気付くって,スプーン使えるようになったとか生活のことなんだけど,ここに来るとあのおもちゃがつまめるようになったとかおままごとに興味持ってるとか知らない間に真似してるみたいなのが気付けて,ここで気付いたことをお家に帰ってから旦那にぶわーって喋るんですけどめちゃめちゃ嬉しそうにするんです。家よりもこっちの方が気付きが多いっていうのか新しい発見が多くて…。(Y-3)

Z：程よい距離感がここではできるので,お友達にこんな優しくできるところがあったんだなと気付けたりとか。(Z-3)

Z:あとは,ママ,ママって来られない分,自分の気持ちにも余裕が出て。家に帰ったらいっぱい遊ぼうねっていうふうに気持ちを切り替えられることができるようになりました。(Z-4)

現在の子育て家庭において,親子が孤立した状態であることは一般的によく言われていることである[*3]。子育てひろばは,子育て支援の施策の一つとして,地域の親子が気軽に集うことを主として提供されている場である。すべての親子がその場に適応し,活用するわけではないが,積極的にその場に集う親子には,そこに通うことによる親子の変化がみられる。

支援者の語り（支-1）からは,親が子どもの遊びの変化から子の関係性の変化を実感している様子を読み取ることができる。子育てひろばでは,子どもの興味が母親である自分ではなく玩具や遊びに向かうことがあり,それによって,子どもに束縛されているという感覚からの解放されているのであろう。また,子どもと密着して生活することによる視野の狭まりは,支援者や他の来場者との会話で解消されている（X-4）。子育てひろばにおける母親と我が子との閉じた関係が,他の人との関係性へと広がりをみせていることがわかる。

このような解放感や視野および関係性の広がりは母親

に何をもたらしているのだろうか。1つ目は,子どもを対象として見ることができる気持ちの余裕と適度な距離である。閉鎖空間では気付かなかった新たな気付きを得て,我が子の成長を実感することへとつながっている(X-3,Y-3,Z-3)。2つ目は,子育てや子どもに向かう活力である。自身と子との関係性の変化から得た安心感や開放感は,これまで抱いていた子育てに対する不安や負の感情を和らげ,子どもに向き合う前向きな気持ちへと変容させていることがうかがえる（X-4,Y-2,Z-4)。

支援者や利用者のインタビュー結果からは,子育てひろばが,地域の親子が気軽に集い,親の子育ての不安を解消し,子どもがそこで成長していくと同時にそれを母親に実感させるという機能を果たしていることがうかがえた。では,こうした機能を果たすために,子育てひろばにはどのような環境構成や支援の視点が必要なのか次項にて考えてみたい。

〈3・5〉子育てひろばの支援の実際

支援者および利用者（X,Y,Z）へのインタビューの結果から,子育てひろばで実際にどのような支援がおこなわれているのか,またそこを利用する親子は子育てひろばに何を求めているのかを人との交流・関係性,子どもの遊び,子育てひろばにおける情報の提供という３つの視点から考察する。

①　人との交流・関係性

Kひろばの支援者が支援で大切にしていることは,来場した親子が楽しめるような雰囲気づくりということであった。最近の親子は特にひろばでグループを作って話す感じではないため,周囲で個々に遊ぶ親子の真ん中に入り,意図的におしゃべりをすることもあるということである。また時には,ひろばで過ごす年齢の違う子どもを見て様子を伝えたり,あえて誘導したりすることで子どもの育ちに関する気づきを促しているということである。

子育てが日常であり,子どものみと向き合う時間が多い母親にとって,子育てひろばにおける他者との会話が育児不安の解消に有用であることは,戸江（2008）の研究[7]やX,Zからのインタビュー結果からも明らかになっている。特にZは産後のうつ状態であったとき,ひろばに来場し,周りの人と話せる環境となったことで解消していったと語っている。一方,子育てひろばでの他の親子との交流は,子どもの遊びの充実と比較すると,それほど望んでいないという研究結果（及川・石井2023）や,Yは近くの子育てサロンで支援者から必要以上に話かけられるため,それが嫌で利用しなくなった（インタビューより）などもある。

子育てひろばに来た親子が孤独を感じることなく安心して過ごせることは重要であるが,すべての母親が積極的な他者との交流を望んでいるわけではない。子育てひろばという同じ場を共有するだけでも親子の関係性は十分に広がることを考慮しながら,支援者は親子が何を求めているかを見極めながら状況に応じて関与していくことが大切であろう。

②　子どもの遊び

及川・石井（2023）の調査では,利用者の利用目的において「子どもを広い場所で遊ばせたい」「ひろばの遊具や玩具で遊ばせたい」「子どもを同じくらいの年齢の子どもと遊ばせたい」等,遊びの充実を重視していることが明らかとなっている[8]。子育てひろばでの遊びの支援について支援スタッフの語りと利用者の子育てひろばでの遊びに関する語りから考察する。

支：おもちゃも,月齢に合わせたおもちゃを分かりやすく書いてあるんです。（「表示してる？」）ひっそりなんですけど,こんなふうに,あくまでも対象年齢とか目安の年齢,お子さんによっていろいろあるので,一応目安として書いてあるだけなんですけど,小さい部品があったりすると危ないので,お口に入れる時は気をつけてねっていう感じで。（支-3）

支：（環境の構成について）少しずつはやってきてて,一応,一段上がっているところが大きい子のおもちゃが集中しているんです,線路のおもちゃとかレゴとか,着せ替えのおもちゃとか。そういう大きい子向けのやつがそちらで,小さい子向けが入口に近い方。・・・一応そういうふうには分けているんですけど,赤ちゃんが寝ているところに,ダーって走っていったりもするので,物を置いて直接はいかないように工夫しているんですけど,すり抜けちゃったりもするので,これからどうするのかっていう,（支-4）

X：（Pひろばは）区切りっていうか,絵本コーナー,おままごとコーナーってなってるので,遊びが散漫しないというか,それぞれ区切られてるので,今,おままごとで遊びたかったらおままごとの方にいってっていうのができるので,ただ,遊びも,まだ0歳なので長続きはしないと思うんですけど,ちょっとそこで集中して遊べる空間があるので,やっぱりいいですよね。（X-5）

Y：ひろばの中で興味あるのはおままごとと,あとクネクネバーン。（ころころ落ちてくやつですね？）

そうです。クネクネバーン。買おうかと思ったんですけどちょっと高くて諦めて。高いーっと思って。でもあの音と,車輪が好きなんです,回るものが。あれがすごく好きで,ずっとあればっかやってるんです。ああいうくるくる回るおもちゃ,いわゆる赤ちゃん向けのやつ。ああいうのが大きくなっても好きなんだみたいな。（Y-4）

支援者の語り（支-3）（支-4）から,Kひろばでは子どもが遊ぶための玩具の配置や掲示,遊びのコーナーの配置等の工夫をしていることがわかる。そして掲示や配置は安全性を第一として考えられていることがうかがえる。子育てひろば利用者へのアンケート調査では,子育てひろばにおいて重視する環境の条件として「衛生面・安全面が守られていること」が最も高いという結果となった(及川・石井2023)。乳幼児が過ごす場であるということを考えると,子育てひろばにおける環境の安全性は最低限重視され

るべきことではあるが,遊び環境について利用者にどのようにとらえているのであろうか。

利用しているひろばの安全性が確保されていることは,アンケート結果からも前提にあることと考えられるが,インタビューの結果からは,子どもが集中して遊べるような空間やコーナーがあること（X-5),高価で買うことができないが,子どもの興味に合った玩具があり子どもの遊びが充実する（Y-4）ことを子育てひろばの魅力としてとらえていることがわかる。子どもが一人で集中して遊んだり,友だちとの遊びが充実することで母親から離れ,親子の適度な距離が創出されると考えられる。では,子どもの遊びの充実において,遊び環境を構成すること以外にどのような支援が考えられるだろうか。

Z:例えば児童館にもたまに行くんですけど。児童館のスタッフさんは子どもとは遊ばないので,ほんと業務をやるって感じなので,ちょっと自分の心に余裕があるとき,子どもと遊んであげようっていうときは児童館に行ったりとか。でも,きょうは友だちと遊んでほしいとか思うときは,基本こういうSひろば,Pひろばとかに行ってます。(児童館さん多分遊ぶ場所はどうぞお使いくださいっていうスタンスなんですかね。)なので,そういう面倒を割と見てくれる。任せっぱなしにするわけではないですけど,多少見てくれるようなところは選んでます。(Z-5)

Zは子どもに向き合う余裕がある時とない時で,利用する子育てひろばを使い分けているということである。子育てひろばに遊びのための空間や玩具があったとしても,子どもが自然に集中して遊び込んだり,友だちと遊び始めるようになったりするわけではない。家よりは余裕のある空間での遊びであったとしても,母子2人が密接して時を過ごすのであれば,場所を家からひろばに移しただけに過ぎない。場所を変えたことによる気分転換はできるかもしれないが,母子の関係性の変化を求めるのであれば,適宜支援者の遊びへの介入が必要となるだろう。

例えば,支援者が子どもの興味をとらえながら一緒に遊ぶ,子どもたち同士をつなぎ,複数の子どもたちの遊びに加わるなどが考えられる。ある子育てひろばの支援スタッフは,母親に意図的に子どもと遊んでいる様子を見せることがあるということであった。これは子どもとの関り方に困難さを感じている母親に対して,間接的に子どもとの関り方の見本を見せるためであるという。親子の子育てひろばの利用目的が子どもの遊びであると同時に,子育ての負担感や不安感の軽減であるならば,今後は子どもの遊び支援によって,どのように親の負担感や不安を軽減させることができるかという観点からひろばの在り方を検討する必要があると考えられる。

③　子育てひろばにおける情報の提供

子育てひろばでは基本事業として地域子育て関連情報の提供があげられている。支援スタッフのインタビューからも,特に他の地域から来た人は,地域にある病院とか小学校とか幼稚園のこと等を情報として求めていることを実感している（支-1)。行政が考える地域子育て関連情報とは,主に子育てに関連する施設（保育施設,子育て支援センター,保健所,小児科病院,等）がどこにあるか,また利用できる支援事業やサービスに何があり,どのように利用できるかといったことである。では子育て中の親が子育てひろばに求める情報はどのようなものなのであろうか。

Z:冊子で子育てマップみたいな,公園はここにいっぱいあるみたいなのに,このバスは（ベビーカー）乗れる？このタクシーなら乗れるとか,そういうのが無いとこれは私は乗る対象者ですか？　っていうのが分かんなくて。だからコミュニティタクシーも乗れるか分かんないから乗らなくても良いように歩くルートを今一生懸命覚えてる。でも子どもが歩くにはちょっと長いとか,そういうのが・・・。

健診とかは別にどこに見ても何をやっても載ってて,知りたいのはそこに行くまでのルートで乗れるものはなんですかとか,行く道の途中にトイレある,コンビニあるとか。例えば急に子どもが泣いておやつ食べたいとか言ったらスーパーありますかとか。Googleマップにも載ってなくて,みたいな情報が欲しい。(Z-6)

Zのインタビューの結果からもわかるように,子育てひろばにくる親子が求めている情報は単なる行政から発信されているような子育てに関するものではない。もちろんこうした情報が行き届いていない家庭に発信することは必要であるが,現在はいつでもだれでもスマートフォン等のネット検索で入手することが可能となっている。子育てひろばを利用する母親の多くはこうした一般的な情報より,Zの語りにあるような個別的であり,日常の困りごとに対する具体的な情報を手に入れたいと思っていると考えられる。前述した病院や幼稚園に関する情報も,A病院の先生は年配で子どもにとてもやさしいとか,〇〇幼稚園はどのような雰囲気で,入園申し込みの初日には多くの人が並ぶといったより身近で具体的な情報を求めているのであろう。

上記のような情報は,子育て当事者である母親や支援者たちの気軽な交流や,何気ない会話から入手することが主であると考えられる。支援者は一般的な情報を提示するだけではなく,情報の交流が生まれるよう,子どもの遊びを介して親同士をゆるやかにつなげていくことが重要となるだろう。

4.　子育てひろばの持つ機能の検討

地域子育て支援事業は,その前身である地域子育てセンター事業の開始から約30年が経過する。はじめにで述べた①～④の実施を基本事業とし,実施カ所の目標数は達成

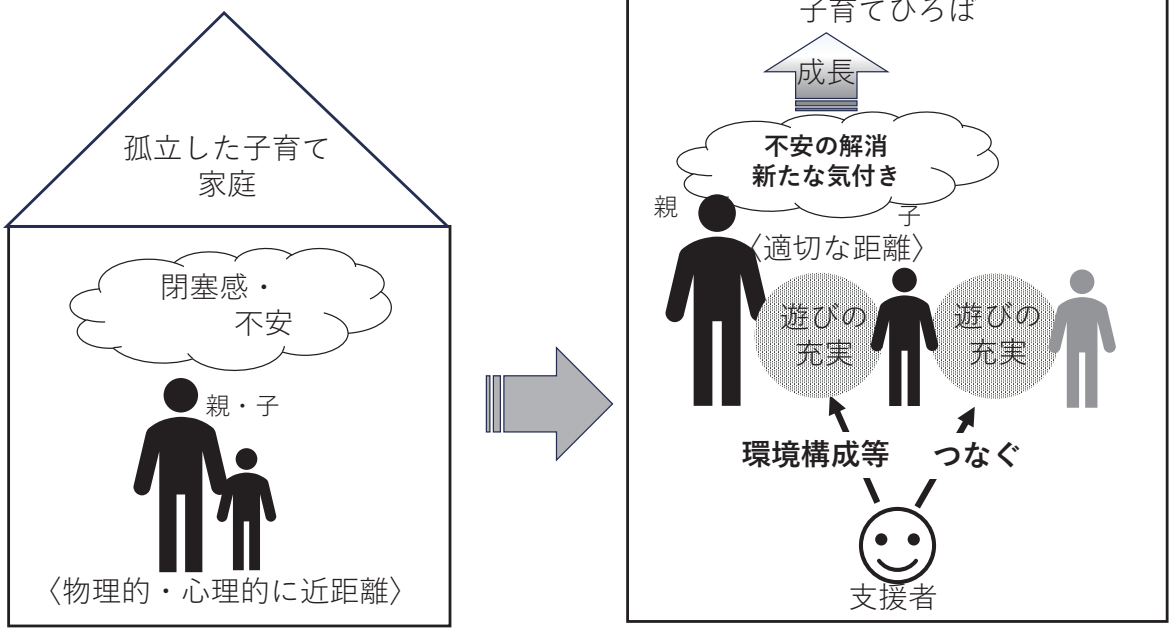

図１　子育てひろばの支援による親子の成長

しつつある。この30年間で子育ての環境や親の意識は大きく変化している。例えば,各自治体には2024年から,こども家庭センターの設置が開始された。そこでは子育てにおける相談を受け,専門の職員がアセスメントを行い,母子保健や児童福祉の包括的な支援を,切れ目なく提供していくことを目的としている。そして,待機児童対策として,保育を必要とする家庭に対応するために,保育施設を増やした。現在では待機児童の問題はほぼ解消し,1,2歳児の59.3%が保育施設を利用しており,それは20年前の利用率の約2.4倍に相当する。

子育て支援施策の拡充により,子育ての環境は大きく変化しているものの,乳幼児期の子育て中の親の閉塞感や不安感は未だ解消されておらず,事業開始当初と変わらず現在でも未就園児を育てる親にとって,子育てひろばの存在意義は大きい。しかしながら,開始当時に考えられていた基本事業と現在の親子が子育てひろばに求めるものに多少のズレが生じていることが今回の研究によって明らかとなった。そこで,子育てひろばという場の特性を生かした新たな機能について提案したい。

それは子どもの遊びの支援を中心とした親子の育ち支援である。もちろん子育てひろばはこれまでも遊びの場の提供を行ってきていることから,子どもの遊びを支援するという視点はあったであろう。違いは子どもの遊びの充実による親子の関係性の変容を主要な目的とし,子の成長とともに親の成長[*4]を促すという点である。子育てひろばは,保育施設とは異なり,親と子が場と遊びを共有するという特性があるからこそ可能となる子育て支援であると考えられる。本研究の研究結果から,親子が孤立した家庭から子育てひろばに場所を移し,遊びの支援を受けることにより親子が成長する様子を図示した（図１）。

5.　おわりに

沖縄県にある多良間島では,近年まで守姉という風習があった。小学生の女の子が血縁のない親から頼まれて,生まれた赤ちゃんの親代わりになるというものである。それは赤ちゃんが３歳になるくらいまで続けられ,その後も一緒に遊んだり子守をしたりするそうである[9)]。数年前に多良間島を訪れたとき,守姉を目にすることはなかったが,異年齢の子どもたちが広場に集まってのびのびと遊び,それを身近に感じながら,地域の大人たちが仕事をしている様子を感じ取ることができた。多良間島では現在でも地域の様々な大人たちに見守られ,子どもたちは安心して育っていくのである。

多良間島ほどではないが,昔は日本各地において子どもは親だけでなく地域の人々と関わり,見守られながら育っていった。かつてのような子どもの育ちを見守る地域コミュニティのほとんどは崩壊してしまった。その代わりとして行政主導の子育てしやすい社会づくりが目指され,かなりの年月が経つ。果たして子育てしやすい社会は実現されたであろうか。公園で遊ぶ子どもの声がうるさいと遊びが制限されたり,保育所で子どもたちが遊ぶ声をめぐり地域住民と裁判になったりする。ベビーカーで電車に乗ったり,ましてや電車の中で子どもが泣き出せば,周囲の乗客から白い目で見られる。乳幼児を育てる親が社会から孤立し,子育てに孤軍奮闘する社会は未だ大きく改善されたわけではいない。

行政主導で整備されていった子育てひろばは,失われた

子どもの育ちを見守る地域コミュニティの新しい形態であると考える。そこでは,子育て中の親子が子どもの遊びを目的に集い,様々な人々との関わりの中で見守られながら親子ともに育っていく。子育て支援者は子どもの遊びを核として,場にいる人のゆるやかなつながりを形成することが重要な役割であると考える。今後は本論文の考察をもとに子育てひろばにおける具体的な支援の方策について検討を重ねていきたい。

引用・参考文献

1)「地域子育て支援拠点事業の実施か所数の推移」地域子育て支援拠点事業実施状況　こども家庭庁資料　https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/321a8144-83b8-4467-b70e-89aa4a5e6735/f496238b/20240529_policies_kosodateshien_shien-kyoten_34　2024年10月31日　検索

2) 及川留美　子育てひろばにおける環境構成の工夫について―親子の関係性と親子間の距離との関連から―　東京未来大学紀要15号　pp.3-23（2021）

3) 及川留美・石井則子　子育てひろばの環境の検討-地域に住む親子の利用ニーズをもとに―　東海大学児童教育学部紀要第2号　pp.70 - 76（2023）

4) 前掲3

5)「保育所等関連状況取りまとめ（令和６年４月１日）」保育所等待機児童数及び保育所等利用率の推移推移　こども家庭庁資料　https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/4ddf7d00-3f9a-4435-93a4-8e6c204db16c/82ad22fe/20240829_policies_hoiku_torimatome_r6_02　2024年10月31日検索

6) 前掲3

7) 戸江哲理 「乳幼児をもつ母親の悩みの分かち合いと『先輩ママ』のアドヴァイス」―ある「つどいの広場」の会話分析-　子ども社会学研究14　pp.59 - 74（2008）

8) 前掲3

9) 根ケ山光一 『アロマザリングの島の子どもたち』 新曜社　p.130 （2012）

注

＊１　例えば,石井クンツ昌子（2009）の父親の役割と子育て参加―その現状と規定要因, 家族の現状についてや森永ら（2015）の父親の親性と母親の育児負担感に関する研究などがある。

＊２　浅井は,子育て支援拠点の従事者と利用者に質問紙調査を実施し,従事者の取組みが利用者のニーズに応えきれていないことを指摘している。浅井拓久也地域の子育て支援拠点における課題と展望-拠点従事者の自己評価と利用者評価の関係に着目して－秋草学園短期大学　紀要37号　pp15-28（2020）

＊３　ＮＰＯ法人子育てひろば全国連絡協議会「地域子育て支援拠点における「つながり」に関する調査研究事業報告書」（2017年）によるとの母親自身が育った市区町村で子育てをしているとの回答割合は,全体では27.8％で,７割以上の母親は自身が育っていないまちで子育てを行っている。また近所に子どもを預かってくれる人がいる」との回答割合は,全体では39.9％で,６割の母親は「子どもを預かってくれる人はいない」と回答している。

＊４　ここでの親の成長とは,子どもとの関係の中で親の役割を取得することをいう。詳しくは及川(2018)を参照。(「母親」としての役割取得に必要な「役割距離」をどのように獲得するか－子育てひろばにおける母親の語り事例の分析から－　幼児教育学研究25号　pp.9-18　2018)